喋べれずの弁

日当　明

球磨のある小学校で教師の研修会が催されるというので、いとこの小学校長から、再三、何か話をせよとの注文があったが、こればかりは、首をタテに振るわけにはいかないので、強引に押しかえし断わった。

私は喋べることが苦手である。酒を飲むと、急に舌の動きがよくなることがあるが、それも、相手が親しい友人かなんかの場合に限る。わが家においても、家内や娘たちと談笑するようなことは、めったにない。別に、腹を立てているわけではないのだが、ただ、ペラペラ喋べることがいやなのである。

しかし、家の者と話をするくらいは、まだよい。困るのは、人前に立って、喋べることである。

出版祝賀会、結婚式、壮行会など、いろいろな催しがある。そういう際のテーブル・スピーチなるもの、一体だれが発明したのか、私にとって、甚だ迷惑な行事である。司会者からいきなり指名されたときなど、実に厄介な負担を感じて、不愉快である。だから、指名されるオソレのある会合には、ほとんど出ない。うつかり出席して、どうしても逃れられない時は、最後の計を用いる。それは、指名の順番が迫った時に、手洗いへ行くフリをして、席を立つのである。そのまま帰ってしまう。

そんなに、人前のおしゃべりが、嫌いなのである。嫌いなばかりでなく、生理的、心理的に不可能事に近いのである。

立って、話をする。たちまち、頭に血がのぼって、何を喋べろうとするのか、肝心の本題を忘れてしまう。これが一番困る。

新聞社でも、春になると新入社員教育というのをやる。二度ばかりそれに引っ張り出された。喋る術を知らない人間が講義みたいなことをやるのだから、無茶な話である。しかし、相手が新入社員なので、苦痛を忍んで引き受けた。

ところが、やはりいけない。

担当の仕事について、ほんの概要を喋べるのであるから、十五分も話せば済んでしまう。いろいろ枝葉をつけたり、肉をつけたりするのが、話の要領というものだろうが、それが私にはできないのである。十五分間で新入社員へのお話しはおしまい。

仕方がないから、新入社員たちを近所の喫茶店に連れて行って、コーヒーを飲ませる。雑談しているうちに三十分間ぐらい経つ。そして、今日はこれでおしまいといってひきあげる。新入社員たちは別に不平もいわなかった。うまいコーヒーをただで飲めたからだろう。

どうもほかの人たちを見ると、私のような例が少ない。熊本の文化人たちの中には、いろいろな会合でなにか面白いこ

冬

田尻牧夫（「鶴」所属）

城澄みて冬は並木の秀より来ぬ
スバル出づ処女の白き息のごと
熔岩枯れぬ残る夕日とさまよへば
鷹翔けて旅の鞄を持直す
潮寒しひたすら橋は灯を連ね
落葉坂女一人はひるがへる

とをいうのがタノシミで、自分の順番のくるのを手ぐすねひいて待っている人がいる。重役さんや、大学教授や、教育委員になっても、喋べることが面白くて司会業がやめられない先輩もいる。私は、そういう人たちが実にうらやましい。そして、自分が言語中枢をやられているのではないかと、考えたりする。人前に出てアガるような年でもないのに、どうしてもダメなのである。よくよく、因果な生まれつきなのだろう。

民主主義の世の中では、能弁でなければ損をする、という人もいる。確かにそうかもしれない、喋べることが嫌いでは選挙に打って出ることも出来ないし、選挙をぬきにしては国会議員にも、県知事にもなれない。そんな大それた野心なんぞ毛頭ないが、日常生活で他人の知らない苦痛に遭遇するのは、損も甚だしいといえよう。

しかし、生まれつきというものは、仕方のないものである。せいぜい、口の足りないところを、ペンで補う勉強をするしかないと思っている。

（熊日論説委員）

ある日突然に

出井弘子

ある日突然にしあわせな妻の座を失い自覚せずして、未亡人という代名詞をもつ仲間入りを余儀なくさせられた一人である私。

そして夢中で過して来た三年間、ふり返って見るとダークグレーに覆われた様な年月である。

そしてようやく泌々とした疲れを心にそし体に感ずるのである。

人生の最も充実した時にこの仲間入りを余儀なくさせられる人は多いのではないかと思う。経文の吾やさき　人やさきけふともしらず　あすとも知らず…なのである。

荒野の中にポツンと一人佇たされ、その悲しみの中からとにかく歩き出さねばならないのである。本当に途方に暮れるという言葉の通り全くどこを向いて歩き出せばいいか分らないのである。無我夢中で歩き出さねばならないのである。残された子供の教育、そして生活。

たった一人で考え、たった一人で実行しなければならないのである。

今まで何一つ実行するにしても常に温かい夫の助言があった筈なのに黒く光る仏壇は何の助言もしてはくれない。しかし考える余裕のある人はまだしもしあわせであり、その日から働かねばならない人もいる。一体何が出来るだろう？　この立場に立たされて一番先に誰しも当面する壁だろうと思う。これという技術がなければ、やはり自分の体力に頼る外はない。

社会のはげしい動きの中にきのうもきょうも不幸な未亡人たちはオートメーションのように何の予告もなく作り出されているのである。

かつての日、戦いという悪夢の犠牲として強いられた戦争未亡人のように……

そしてその悲惨な多くの女たちのやり場ないかなしみを立場は異っても想像する事は出来るのである。そして今も昔もその多くは社会の底辺で日の目を見ることもなく低賃金に甘んじ、ほこりも自負も夢さえも持てぬ毎日を過しているのだと思う。

もし自分に万一のことがあったら……という底知れる不安におびえながら…。そんな悲哀もいつの時代も変りはしない。

社会機構のむつかしさは分らない。

でもこの労働力に少し磨きをかければきっと優秀な日本の労働力になり得ると思うのである。たとえば不足を訴えつづける看護婦である。それぞれ何人かの子供を育てる過程に必らず子供の看病をし、その処置に対してどの看護婦よりも優秀な看護婦となり得た経験をもっていると思う。でなければ子供は育たないから——。その愛情プラス技術だと思う技術は体得するものだと思う。きっと真剣に学ぶだろう。そして社会に直接役立てるよろこびを味あう子供たちを含めて誇りと自負を見出せる。そんな職場が欲しいと切に思うのである。子供たちも母親の職業に賛意と尊敬をきっと持ってくれるに違いない。

職業に貴賤はないという言葉は小学生でも知っている。

でもそれは言葉として知っているのであって子供たちは常に母を美しくと希い目にとらえられるもので尊敬したいのである。肉体労働者が決して悪いと言うのではない。

ただ余りにもはげしい労働に身も心もすりへらし、命を粗末にしてもらいたくないという私の切なる希いとして。なお子供の安心と満足を望むから—。

しあわせな時に逆境を考えるのはむつかしい。又、しあわせな時位しあわせに生きて欲しい。

ただもしも逆境に立された時に戸迷わないだけの社会的な受け入れ態勢が欲しいと思うのである。

老人の日があり子供の日があるのになぜ未亡人の日がないのだろう。両親の分の責を一人の肩に負い、教育と生活の谷間に心身をすりへらしている未亡人に一年一日ぐらいの有給休暇があってもいいように私は思う。

一日の労を終えてやれやれと思うひとと、常人と異る時間帯に生活する私は深夜の部屋でこんな事を考えるのである。

いとけなき日の仕草など語りつつ
今日も終らむ母と子の夕餉

（「炎歴」同人）